

# 「場所」での支配の「民営化」

地域産業  
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



「オムシャ」。オムシャはもともとは、和人がアイヌ地(蝦夷地)に来て交易する時の儀式だった。シャクシャインの戦い後、松前藩がアイヌ民族を支配するための行事となった。(『日高アイヌ・オムシャの図』 函館市中央図書館蔵)

シャクシャインの戦いののち、松前藩によるアイヌ民族支配はきびしくなりました。

これまで、アイヌ民族は松前藩から独立した身分だったのですが、松前藩主に従うことを誓わされました。

北海道各地の交易地であった「場所」についても、変化がありました。

松前藩の上級家臣が直接支配するのではなく、商人に「場所」をまかせて、かわりに毎年一定のお金を受け取るやり方(場所請負制度)に変わっていったのです。

十勝にあった「トカチ場所」でも、18世紀前半ころに、商人による支配が始まりました。

トカチ場所の拠点は、はじめトカチ(十勝太:浦幌町)にありましたが、その後ピロウ(広尾)に移ります。

| 年                      | 支配商人(場所請負人) |
|------------------------|-------------|
| 18世紀末                  | 濱屋久七        |
| "                      | 栖原角兵衛       |
| 1799~1811              | (幕府の直接支配)   |
| 1812                   | 近江屋上田三郎次    |
| 1819                   | 大阪屋卯助       |
| 1825                   | 福嶋屋嘉七       |
| 1841                   | 福嶋屋清兵衛      |
| 1854<br>(~1869 = 明治2年) | 福嶋屋杉浦嘉七     |

18世紀末より、トカチ場所を支配した商人(場所請負人)。  
(『蝦夷草紙別録』、『栖原角兵衛履歴』、『場所請負人及運上金(河野常吉)』、『十勝川の川舟文化史 濤標』、『新北海道史年表』より)

## 商人による「場所」の支配

商人にとっては、もうけることが一番大切なことです。ものを交かんする交易よりも人をやとって働かせた方が、ほしいものをたくさん手に入れやすく、命令しやすくなり、もうけやすくなります(失敗すると損も大きくなります)。

アイヌの人々は、自分たちの意志で狩りや漁をしていた状態から、商人にやとわれるようになりました。商人の命令で、漁をさせられ、産物加工をさせられるようになっていったのです。

一方で、商人には、アイヌの人が苦しんだり困ったりしないように、との指示も出されていました。1789年には十勝川が凶漁で、飢え死にする人が出たため、当時の支配商人・栖原角兵衛は救助米を出して、アイヌの人100人を助けたといわれています。

## 「場所」で行われたひどい支配

すべてのアイヌの人たちが、商人に使われてばかりいたわけではなく、自分で漁をした魚を商人に売る人もいたようです。

しかし、多くの「場所」では、自分でとった魚のうち2割を商人に納める「二八取」をさせられたり、商人の漁場にやとわれた人が一年中働かされ、家族の待つコタン(集落)へ帰れなかったりするなど、ひどい支配がおこなわれました。

中でも、クナシリ(国後島)とメナシ(東部・知床や根室など)では、支配商人の飛騨屋らが、アイヌの人を安い労賃で冬のたくわえもできないほど働かせ(飢え死にする人も)働きが悪いといってマキでたたき殺したり、アイヌ女性に乱暴するなど、めちゃくちゃなことがまかり通っていました。



アイヌ文化期の北海道の東部(メナシ)と国後島(クナシリ)。

## クナシリ・メナシアイヌの戦い

1789年、こうしたひどい状態であったクナシリで、マメキリの妻とサンキチというアイヌの2人が、和人からもらったものを口にしたあと、相次いで死にました。

これをきっかけに、クナシリの若手アイヌら130名が立ち上がり、飛騨屋支配人らをおそいます。襲撃は対岸のメナシ地方にも広がり、71人の和人が殺されました。

松前藩は260人の兵をこの地に送り、協力的なアイヌの長らを通じて彼らをなだめ、ノッカマップ（根室市）に集めます。

しかし、松前藩兵は集まった人たちをとらえると、「飛騨屋もひどいことをしていたが、うったえもせず多くの人を殺したことは許せない」として、殺害をおこなった37人に対して死罪をいいたしました。

数人の首が斬られたあと、さわいだ牢の中の人たちは鉄砲で撃たれ、逃げようとした人はやりでつかれ、37人全員が殺されました。



1789年、クナシリ・メナシアイヌの戦いが起きた北海道東部。  
●：和人をおそったところ。死刑はノッカマップ（根室市）でおこなわれた。  
（『アイヌの歴史と文化』より、改変）

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

## 「トカチ場所」での産物

1739年ころ、トカチ場所では、干したサケ、ワシ・タカの羽、塩づけのツル、シカの皮、クマの皮などがおもな産物でした（『蝦夷商賣聞書』）。

1808年ころの産物としては、フノリ、コンブ、ブリ、タラ、カスベ（エイ）、カレイ、サメの皮、アツシ（アットウシ：木の皮のせんで作った服・布）などがあります。オシラベツ（音調津：広尾町）、ピロウ（広尾）などではコンブがとられ、タンネイソ（タンネソ：広尾町）では、フノリがとられていました（『東蝦夷地各場所様子大概書』）。

さらに、1854～1856年ころには、サケ、マス、イワシ、ブリ、煮たナマコ、コンブ、フノリ、シカの皮、クマ（の皮？）、ワシ、材木〔モミ・エゾマツ・ツガ〕（『松前蝦夷地場所請負制度の研究』『蝦夷行程記』）などが、トカチ場所の産物として記録されています。



(上)北海道のツル、タンチョウ（サロルンカムイ）。塩づけにされ交易品とされた。



(上)北海道のシカ、エゾシカ(ユク)。



(右)「アットウシ」。オヒョウ（アソビウ）という木の皮のせんで作られる服。

(上土幌ウタリ文化伝承保存会 上土幌町・東泉園)

## 生活の一部となる「やとわれ仕事」

アイヌの人々にとって、和人との交易は大切なことです。その交易相手の和人が、ものだけではなく「やとわれ仕事（労働）」を求めるようになりました。

強制され、どれいのようにあつかわれることもあり、それほどでもない場合でも、かなり安くやとわれていたようです。

やがて、和人商人のもとで仕事をするのが、多くのアイヌの人々にとって、生活の一部となっていま

した。

あまりひどい支配がおこなわれない「場所」では、春から秋にかけて、若者や働きざかりの男女が、海岸の漁場などへ「やとわれ」に出ます。そして、秋から冬にはコタンに帰り、動物の狩りをおこなう、という生活のサイクルができあがっていったようです。

「やとわれ仕事」の期間、内陸のコタン（集落）には、老人と子ども、それに母親らが残されていました。

1 ノッカマップ：アイヌの37人が処刑された、根室半島のノッカマップでは、昭和49年（1974）から毎年、アイヌの人たちが中心になって「イチャルバ」という供養祭（くようさい）をおこなっている。クナシリ（国後島）を見わたす海岸の丘にイナウ（カム

イ（神）にささげる木製の祭祀具（さいしぐ）が立てられ、伝統的な方法によっておこなわれる。この翌日、「飛騨屋の71人はアイヌの人々を苦しめた者たちだが、犠牲者（ぎせいしゃ）には変わらない」として、和人に対してイチャルバがおこなわれる。